

第9分科会

学生の学生による学生のための ラーニングコモンズ

報告者

巳波 弘佳（関西学院大学 学長補佐／理工学部 教授）

伊藤 守弘（中部大学 学生教育推進機構コモンズセンター長／生命健康科学部 准教授）

コーディネーター兼報告者

長谷川岳史（龍谷大学 学修支援・教育開発センター長／経営学部 教授）

参加人数

55名

現在、名称や形態は様々だが、いわゆる「ラーニングコモンズ」が、多くの大学で設置されている。しかしながら、学修環境として教職学協働で有機的に運用している大学がどれほどあるだろうか。大学側の開設の意図が学生にうまく伝わらず、結果、禁止事項を増やさざるを得なくなったり、「こういうふうにも利用したい」という学生の積極的な要望に応えることができなったり、課題を抱える大学や現場の担当者は少なくないと思う。アクセルを踏もうとする学生に、ブレーキをかけるのではなく、走りやすい「学び」の環境をどのように整備したらよいか。

本分科会では、コモンズの運用やコモンズを拠点とする活動について、学生を主体に展開している大学の事例をもとに、「学生の学生による学生のためのラーニングコモンズ」のあり方を考えてみたい。

〈第9分科会〉

学生の学生による学生のためのラーニングコモンズ

1. 企画概要

現在、名称や形態は様々だが、いわゆる「ラーニングコモンズ」が、多くの大学で設置されている。10年前の状況とは隔世の感がある。しかしながら、学修環境として教職学協働で有機的に運用できている大学がどれほどあるだろうか。

言うまでもないが、「ラーニングコモンズ」や「学びのコミュニティ」に定義はない。定義やコンセプトの明確化は、各大学が独自に行わなければならない。スチューデントコモンズ、グローバルコモンズなどという分類もあるが、これらの機能をすべて包括した「ラーニングコモンズ」もあり得るし、図書館内に設置する場合とそうでない場合、ライティングセンターなどの機能も有している場合とそうでない場合など、様々である。よって、「ラーニングコモンズ」一般や「学びのコミュニティ」一般というようなものはないのである。

そのため、学生の主体性を「学び」という文脈で発揮させるために、大学がどのような「学修支援」を提供できる「場」「空間」を、多様な学生のために用意できるのかという点を考え、コンセプトを明確にして運用する必要がある。

ただし、注意しなければならないのは、「学修支援」は、学生を「消費者」にみたてた一方的な「サービスの提供」ではないということである。学生は「学修者」であり、「主体的」な「学修」を促すための「気づき」の「場」や「機会」を与えることが「支援」なのである。あくまで主役は「学生」である。

しかしながら、現状は、アクセルを踏もうとする学生に対して、大学側はブレーキにしかなっていない場合も多いのではないだろうか。大学側の開設の意図が学生にうまく伝わらず、結果、禁止事項を増やさざるを得なくなったり、「こういうふうにも利用したい」という学生の積極的な要望に応えることができなったり、課題を抱える大学や現場の担当者は少ないと思う。

アクセルを踏もうとする学生にブレーキをかけるのではなく、走りやすい「学び」の環境をどのように整備したらよいのか。「～しかできない」「～は無理」ではなく「～もできる」可能性を秘めた場へと育てていくためにはどのような方策が考えられるのか。

本分科会では、コモンズの運用やコモンズを拠点とする活動について、学生を主体に展開している関西学院大学と中部大学の事例をもとに、「学生の学生による学生のためのラーニングコモンズ」のあり方を考えてみたい。



2. 分科会当日のスケジュール

- 10:00～10:10 開会挨拶・趣旨説明 長谷川岳史（龍谷大学）
- 10:10～11:10 事例報告① 巴波弘佳（関西学院大学）
「学生の学生による学生のための生きた学びの場
～関西学院大学アカデミックコモンズの事例～」
- 11:10～12:10 事例報告② 伊藤守弘（中部大学）
「学生の学生による学生のためのラーニングコモンズ」

- 12:10～13:40 昼休み
- 13:40～14:00 事例報告③ 長谷川岳史（龍谷大学）「龍谷大学ラーニングコモンズ」
- 14:00～14:30 質問・コメント票に対する登壇者からの回答・補足説明
- 14:30～15:00 グループディスカッション・情報交換
- 15:00～15:20 グループディスカッションの報告
- 15:20～15:30 登壇者からの総括コメント

3. 分科会の概要

午前の部では、「学生の学生による学生のためのラーニングコモンズ」というテーマのもと、コモンズを「学生の学生による学生のための」場（知的空間）と位置づけている関西学院大学神戸三田キャンパスのアカデミックコモンズと、中部大学不言実行館 ACTIVEPLAZA のラーニングコモンズ及びスチューデントコモンズの事例報告を行った。

現在、いわゆるラーニングコモンズは多くの大学で設置されているが、それを「学生の学生による学生のための」場と位置づけ、明確なコンセプトのもと、学生主体で運営している大学は数少ない。

事例報告いただいた両大学に共通しているのは、コンセプトが明確であるという点と学生の感覚を大切にして学生を信頼しているという点である。これは決してすべて学生任せにしているということではない。学生が主役になり成長するためのサポートを、関西学院大学では「アカデミックコモンズ活性化委員会」が、中部大学では「コモンズセンター」が教職協働で行っているのである。

両大学の報告の詳細は、この報告集や大学HP等を参照していただきたいが、学生の主体的な活動としては、関西学院大学では「アクティビティ」「アカデミックコモンズ・プロジェクト」、中部大学ではコモンズインターンシップと位置づけられている「コモンズサポーター制度」に是非とも注目していただきたい。そのコンセプトの明確さと活動内容の充実ぶりに驚かされるであろう。

午後の部の前半では、まず一般的な大学の事例として龍谷大学におけるコモンズチューターのライティング支援について報告した。期せずして、関西学院大学・中部大学・龍谷大学ともに、コモンズに入場ゲートや過度な設備を設置せず、オープンスペースで「活動の可視化」を重視している点が共通していた。

続いて、昼休み前に回収していた質問・コメント票に対する登壇者からの回答・補足説明を行った。質問は、大学全体に関するものとしては、学内の意思決定プロセスや他部署との関係、教職協働のあり方に関するものが多かった。学生に関しては、コモンズに関わるチューターやサポーターの研修方法に関するもの他に、学生のマナーなどをどのようにコントロールしたらよいか、コモンズを利用する学生は成長しているのか、コモンズの活動に参加した学生のインセンティブ（単位化）はあるのか、学生を集めるためにはどうしたらよいか、といったものがあつた。

学生に関する質問についての回答を筆者自身の所感を交えてまとめると、学生のマナー面については、関西学院大学・中部大学・龍谷大学ともにオープンスペースであるため行動が可視化されており、これがマナー違反を抑止している。よって、コンセプトが明確でそれが学生に伝わっていればさほど大きな問題は生じない。当然、注意することもあるが基本「大人の対応」をすれば十分である。

学生の成長についても、学内に説明するために目視で利用者数などのデータを取り、アンケートなどをする場合もあるが、コモンズは正課の場ではなく交流と創造の場であるので、実感や活動状況から「成長している」と言っても、それを数値等で測り示すことは困難である。むしろ、測定することよりも、コモンズにおける学生の活動を積極的に発信していくことが重要である。当然、その活動への参加は、学生の自主性・主体性に基づくべきであり、参加することに対する単位化などのインセンティブは必要ないし、コモンズのコンセプトとも全く一致しない。

学生を集めるためにはどうしたらよいかという点については、学生が集まりやすい環境にすることは当然であるが、企画等の仕掛けにおいても、学生は興味があれば行動する。学生が集まらないのはその



環境や企画等の仕掛けが面白くないからである。コモنزの運営は、失敗を繰り返しながら試行錯誤することであり、学生と向き合いながらよりよい環境や仕掛けを考えていくことが重要である。

午後の部の後半は、まず、グループディスカッション・情報交換を行い、各大学の現状や課題について話し合った。分科会には、教職員のみならず学生も参加していたので、それぞれの立場から熱のある議論が行われた。最後にグループごとの議論の状況が報告されたが、やはり、多くの大学は、先の質問・コメント票で出された点について課題を抱えていた。

最後の登壇者からの総括コメントでも言及されたように、質問・コメント票やグループディスカッション・情報交換で出された課題を解決するために重要なのは、コンセプトの明確化と共有のための努力である。コモنزの担当者が最も苦勞する点ではあると思うが、コモنزがどういう場であるのか、大学全体、教職学間でそれが共有されていなければ、コモنزが交流と創造の場、「学生の学生による学生のための」場（知的空間）になることはない。各大学が様々な制約の中で模索しながら、どこまで学生の感覚を大切に学生を信頼することができるのか、「学生の学生による学生のためのラーニングコモنز」の発展の鍵はここにあると感じた。

4. 参加者からのコメント～まとめにかえて～

この分科会では、巳波弘佳先生（関西学院大学）と伊藤守弘先生（中部大学）に、真摯に学内の状況も包み隠さずご報告いただいたおかげで、参加者には「こうすればいいのか」という気づきとともに「こうしてもいいのか」という発見があったと思う。会場は終始、気づきと発見に満たされた一体感に包まれていた。

それを感じていただくために、参加者からのコメントをいくつか紹介して、まとめに代えたいと思う。

- ・大変参考になった。ラーニングコモنزのコンセプトづくりからしっかりやっていきたい。
- ・学生に真剣に向き合っている先生方のお姿を拝見し、たくさんの刺激とアイデアを提供していただきました。とても参考になりました。
- ・現場の声、他大の事例等伺えて、大変勉強になりました。全学で考えていく必要があると痛感した。
- ・参加してとても良かったです。現状を知れました。コモنزの設置に活用させていただきます。
- ・理想と現実がきちんと見えてきたと思います。ラーニングコモنزには、理念が必要だということ。やはり、1つの独立組織である必要があると思いました。
- ・各大学における実践例は非常に参考になった。本学にどのように導入するかを考えられる機会を提供いただき、ありがとうございました。
- ・とても興味深くこれからラーニングコモنزを立ち上げるヒントを多く得られました。
- ・ラーニングコモنزと学生の活動力のリンクを中心に話しをしていただき大変勉強になりました。やはり学生の成長を促すにはスタッフがどのような思いを持っているかが重要だと再確認しました。
- ・立ち上げから現状まで、様々な視点でお話いただき、大変興味深く聞かせていただきました。「学生による」というテーマから、実際にスタッフとして働いている学生たちの意見なども聞く機会があれば、よりイメージを持てたかと感じました。本学でも学生スタッフを育てたいと考えております。今後、学生交流などもできれば幸いです。
- ・具体的な取り組みプラス、その活動の意義と実践をよく理解できました。また、本学での取り組みに、今後どのようにこれらのアイデアを採り入れていけるのか、考える機会になりました。

最後に、分科会では、時間の都合からグループディスカッション等の時間が十分確保できず、参加者の皆様にはご迷惑をおかけした。これはコーディネーターである筆者の責任である。ここに深くお詫び申し上げます。

コーディネーター 龍谷大学 長谷川岳史

学生の学生による学生のための生きた学びの場 ～関西学院大学 アカデミックコモنزの事例～

関西学院大学 学長補佐／理工学部 教授 巴波 弘佳

1. アカデミックコモنزについて

(1) 概要およびコンセプト

2013年4月、理工学部と総合政策学部の学生約5,000人が学ぶ神戸三田キャンパスにアカデミックコモنزを開設した。この建物は、南北方向に各学部の授業・研究活動エリア、かつ、東西方向に通学アクセス拠点となるバスロータリーと図書館を結ぶ形で、キャンパスの中心に建設されている。

アカデミックコモنزは、『「学習」と「憩い」と「学生活動」の融合』をコンセプトとする、『学生の学生による学生のための生きた学びの場』である。学生、教職員、OB・OG、学外の人々との多様な出会いを通して新たな世界を開拓し、主体的に学び、探究とディスカッションを通して価値あることを創造する楽しさを知り、それを広く発信して知を共有する輪を広げる、このような活動の拠点となる空間を目指し、現在4年目を迎えている。

(2) 空間的特徴

アカデミックコモنزは、図書館とは独立した2階建て約4,080㎡の建物である。2階まで吹き抜けで自然光を多く取り込み、空間を遮る壁が一切ない、約800㎡の「アクティブラーニングゾーン」をはじめ、「シアター」「プレゼンテーションルーム」「クリエイティブスクエア」など異なるスタイルの発表ができる空間を設けている。また、可動式の机やホワイトボードを配置しており、学習スタイルやグループの規模に応じ、学習空間を自由にデザインできる。学部や学年に関係なく、お互いの学びを確認しながら「学び方を学ぶ」ことができる知的創造空間となっている。

(3) 学生の利用状況

アカデミックコモنزは、授業と定期試験期間中の平日8:50から22:00まで開館し、ほぼ全ての空間が予約なしで自由に利用できる。また、学生たちが自由に出入りし、活発な利用を促進するため入退館を管理するゲートは一切設置していない。そのため、正確な利用人数を数値で把握することはできないが、現在では、曜日・時限により差はあるものの、日中はほぼ座席が埋まることが多い。さらに、夜間においても閉館時間近くまで残る学生が年々増加している。これは、アカデミックコモنزの横にバスロータリーを併設したこと、バス会社との交渉により夜間の同ロータリー発の便数を増発し、行き先が異なる3つの路線が同時に発車するよう工夫をしたことで、帰宅時間の目標を定め利用するようになったことが理由の一つと考えられる。

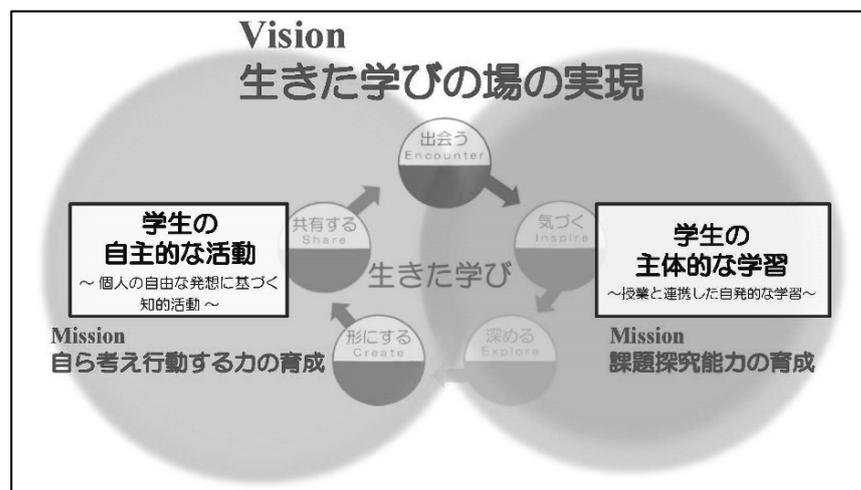
また、開設以来毎年、両学部の新入生オリエンテーションで30分の時間を設け、施設の目的、利用方法、活動紹介など行っている。結果的に、最初に先輩たちの活動を紹介することが自然と利用ガイド・マニュアルとなりマナーのある使い方につながっている。

2. アカデミックコモンズにおける学生支援体制について

(1) アカデミックコモンズ活性化委員会

アカデミックコモンズでは、検討当初から授業課題の学習場所という位置づけに留まらず、学生が興味を持ったことにグループで挑戦し、探究・発表することも広く大学での学びと捉え、むしろ積極的にこのような活動を取り込み、展開する場にしたいと考え議論を重ねてきた。2013年の開設時、アカデミックコモンズには専門性を持った教職員を配置した専門部署を設ける代わりに、キャンパス内の知識やアイデアを集結する『アカデミックコモンズ活性化委員会（以下、「活性化委員会」という。）』という教職協働の組織をつくり、現在も活動を継続している。現在、理工学部と総合政策学部の教員3名ずつ6名と、学部や図書館を含む4つの事務局より若手職員を中心に8名、後述するクレセントコーディネーター1名の合計15名で構成している。

活性化委員会は、開設以来3年間をかけアカデミックコモンズのVision（図1）を策定し、これを達成するため『学生の自主的な活動』と『学生の主体的な学習』の2面から、学生の素養を引き出し学生が主役になり成長するための「仕掛け」を展開してきた。



(2) クレセントコーディネーターの役割と活性化委員会との連携

クレセントコーディネーター（以下、「コーディネーター」という。）は、週の一定期間アカデミックコモンズに常駐し、学生たちと接する機会を積極的に設け、活性化委員会のメンバーだけでは実現することが困難な、学生が「今」抱える課題に対して必要な支援を、専門家の立場からフォローアップしている。

アカデミックコモンズには上記のとおり、専門的な教職員を配置した専門部署を配置していないことから、丸善株式会社（現、丸善雄松堂株式会社）と業務提携を行っている。その一環として、教育工学分野を背景とする教員をコーディネーターとして派遣してもらい、活性化委員会の一員として、日々の学生の現状や課題を共有しながら、学生支援に取り組んでいる。

3. アカデミックコモンズにおける学生の活動について

活性化委員会が支援する対象でもある『学生の主体的な学習』と『学生の自主的な活動』

の具体的な内容は以下のとおりである。

(1) 学生の主体的な学習（授業と連携した自発的な学習）について

アカデミックコモンズでの学習を支援するため、開設当初から、大学院生による有償のチューター制度を導入している。クレセントチューター（以下、「チューター」という。）は、学部と連携し学力面や意欲の高い学生を採用し、2013年度9人、2014年度15人、2015年度18人、2016年度17人と推移している。チューターは、アカデミックコモンズ内の所定の場所に1名が待機し、主に低年次の学部生を対象に、レポートライティングなどのアカデミックスキルに関する学習支援や、チューター自身の専門分野に関する学習相談を行っている。

チューターの育成に関して、前述のとおりライティングスキルなどの技術的な部分はコーディネーターによる講習を受けているが、チューター自身の成長を促がすため各学年からリーダーを選出し、目指すものや役割、ビジョン、活動内容について活発な議論を行うなど、高い意識を持って、研究活動と両立させながら問題意識を持って取り組んでいる。活性委員会は、ミーティングに参加するほか、学部の授業レポートを課す担当教員と連携し、チューター制度の紹介や相談に行くことを促している。

就職活動や研究活動で提供時間が変動しているが相談件数は年々増加傾向にあり、2013年度126件（春学期：52件、秋学期：74件）、2014年度156件（春学期：96件、秋学期：60件）、2015年度165件（春学期：101件、秋学期：64件）、2016年度春学期36件となっている。

質問内容としては、レポート課題や授業に関するものが大半を占め、中でも数学に関するものが多かった。

(2) 学生の自主的な活動（個人の自由な発想に基づく知的活動）について

アカデミックコモンズでは、授業課題（フォーマルラーニング）の学習場所という位置づけに留まらず、学生が興味を持ったことにグループで挑戦し、探究・発表すること（インフォーマルラーニング）も広く学びと捉え、支援する場と位置付けている。正課授業に関連する課題に取り組む場として活用されることが多いラーニングコモンズに、正課授業とは直接的に関連づかない学生の活動を展開している点がアカデミックコモンズの大きな特徴である。アカデミックコモンズにおけるインフォーマルラーニングとは、学生の自主的な活動を促し、授業に限らず学生が興味・関心を持つ領域に関するさまざまな活動を、自分たち自身が、企画・立案・実施まで行うことである。学生の自主的な活動を生み出すきっかけづくりとして、以下の2つの仕掛けを設けている。

① アクティビティ

アカデミックコモンズでは、楽しく、気軽に参加し、企画しているうちに、人と人が出会い、自然に幅広い視野やコミュニケーション能力を養うことを狙い、5つのフィールド（『気づき・出会い』『もの・ことづくり』『グローバル Link』『たて・よこきずな』『KGファン創出』）でアクティビティを展開している。

アクティビティは、企画書を活性化委員会に提出し、許可を得ることで企画・実施できる。学生、教職員が一体となり、2013年度は105回、2014年度は129回と、2015年度は112回、2016年度春学期は54件、多種多様な内容で展開し盛り上がっている。

アクティビティには、学生の自由な発想に基づき実施されるものや、活性化委員会など

教職員から仕掛けるものがあるが、両者とも学生の意識を刺激する点では差異はない。活性化委員会が中心となり開催しているアクティビティに「クレセントアワー」がある。毎週水曜日のお昼休みに教職員、学生が「難しい話は一切無し」をルールに自分の活動や研究を熱く語るもので、アカデミックコモنزのオープン以来1週も欠かさず開催しており、現在で108回を数える。

②アカデミックコモنز・プロジェクト

グループで、一定期間で達成する目標を掲げ挑戦する『アカデミックコモنز・プロジェクト』を3つのタイプで展開している。1年間を通じてグループで活動する「リード・タイプ」において、2013年度6グループ、2014年度11グループ、2015年度7グループ、2016年度11グループが展開している。年によって増減はあるが、今年度は応募の段階で12グループからの申請があり、活性化委員会の審査の結果11グループとした。ここには、総合政策学部、理工学部の学生約100人が参画し、4つのグループは新入生（編入生を含む）を中心としたメンバーによるものである。

「リード・タイプ」は、1年間を通してアカデミックコモنز内の部屋や備品を占有できる特典を得ながら目標達成に挑戦している。アカデミックコモنزにおける先駆者としての自覚を持ち、他者や周囲の模範にもなる高い成果とプロセスを追及することを期待している。同時に、アカデミックコモنز内で成果を披露・還元することを推奨しており、他の学生がこれらの活動を目にすることで、刺激を受け、あこがれや新たな挑戦を生み出すことを期待している。この一環として、新入生をターゲットとして、前年度のプロジェクトによる成果発表会を開催したことも、新入生たちを刺激し良い影響を与えたと考えられる。

また、期間を定めずこれまでのアクティビティやプロジェクト、個人的な活動を発展させるなど、グループで可能性に挑戦する「チャレンジ・タイプ」には12グループが、学内外で実施させるコンテストにグループで挑戦する「コンテスト・タイプ」には4グループが挑戦中である。

多種多様なプロジェクトが生まれており、中には年度をまたぎメンバーを入れ替えながらも発展的に継続されるものもある。これらは卒業単位とは一切関係なく、参加に強制力はないが、以前から学生の中にある「何かをやってみたい」「やり遂げたい」というニーズがあり、それを実現するための仕組みとして機能していると考えられる。

4. 今後の発展に向けて

2013年の開設以降、学生の自主的な活動を推進・支援するという独自の取り組みを展開してきた。学生にもアカデミックコモنزの理念や意義が少しずつ浸透し、創造的な取り組みが次々と生まれている。アカデミックコモنزでは、当初学生たちだけの力で、常に刺激しあい活発に活動を生み続けることを目指し、学生支援体制の構築に取り組んできた。その結果、意欲が高く、挑戦したいという志を持つ学生を取り込むという一定の成果を得ることができたといえる。

一方で、これまでの様々な取り組みを通して、学生だけに閉じた体制では力強い持続発展的なサイクルを生み出し続けていくには多くの課題があるのも事実である。今後は学生たちとともにこの解決策を見出すのがアカデミックコモنزの最大の使命であると考えている。

学生の学生による学生のためのラーニングコモンズ

中部大学 学生教育推進機構コモンズセンター長／生命健康科学部 准教授 伊藤 守弘

開学 50 周年を記念して建設された「不言実行館 ACTIVE PLAZA」にコモンズセンターがオープンして 2 年が経過しようとしています。ここであらためてコモンズセンターをご紹介します。

●学生支援センター棟建設を構想

本学は 2014 年、開学 50 周年の記念すべき年を迎えました。創立者三浦幸平先生は「大学は 50 年たってやっと大学らしくなる」と常々言われていたそうです。まさにその思いを受け継ぎ、中部大学は工科系 4 学科の中部工業大学から 7 学部 30 学科、大学院 6 研究科 17 専攻の中部圏における私立総合大学に発展しました。

2012 年春、新たに学生支援センター棟を建設する構想が出されました。そのきっかけは、飯吉厚夫理事長による「本学に研究支援センターがあるのであれば、学生支援センターがあってもよいのではないか。研究と教育そして学生の学びの場所として学生支援センターが存在して初めて、建学の精神である『不言実行、あてになる人間』が具現化できることになる」という発言でした。これを受けて、学生支援センターの設置を検討することになり、2012 年 6 月に「学生支援センター棟構想プロジェクト」が教職協働のもとで発足しました。

●「何か動き出す」そんな予感がする場所

“コモンズ”とは、「共有のスペース」を意味します。学生の主体的、自主的な学びの場所であることに加えて、学生相互の交流や教職員とのコミュニケーションを高める場所でもあり、2015 年 4 月にオープンしました。

いま、大学に求められているのは、学生が自ら考え、学生同士で対話し、さらに刺激し合うことです。また、新たな気づき、そして行動することを促す教育プログラムであると言われています。これまで中部大学では、学生ホールや学生ラウンジなど、学生が自学習をはじめ授業後に集うためのスペースをキャンパス内に数多く提供してきました。そして、その活用や成果は学生生活に潤いをもたらす勉学への力を与えています。し

かし、時代の変化も反映し、主体的に人間関係を築くことが強く求められる中、新しい発想で学生同士が積極的に交流できる環境の整備と、これを活用するプログラムが必要となりました。そこで、環境の整備としてこれまでの本学には無かった新しいコンセプトの施設が誕生しました。

学びの場ではありますが、正課の授業では使いません。そして、食事や休憩をする場所でもありません。コモンズセンターのコンセプトは、学生が自由に集い、自由な発想で使用できる、みんなの「居間」のような場所です。そして、学生自らの力で育て、創る、シェアスペースです。居心地の良さを備えた空間には、ひとりでもグループでも利用できる有意義な学習環境が築かれ、学生が学生たちの学習や活動をサポートし、運営を進めるのが特色です。「何かが動き出す」そんな予感がする場所”だと表現したいと思います。

● 学生による学生のためのサポート

コモンズセンターの運営は、学生のための施設である以上、学生に担って欲しいと構想プロジェクトの時から考えていました。そこで、「学生の学生による学生のためのサポート」の提供を目指し、『コモンズサポーター制度』を設置し、コモンズ・インターンシップと位置づけました。実社会に出る前に就業経験を積み、「仕事とは何か」「社会とは何か」「責任」について学んでもらうことが目的です。現在、20名の学生がコモンズサポーターとして必要なコミュニケーションスキルなどを学ぶ研修を重ね、運営を担っています。コモンズサポーターの設置には、大学関係者、多くの方々のお力添えにより実現することができ、大変感謝しております。

コモンズセンターのオープン当初、ICT機器の貸し出しや予約受付など、問題無く運営されていましたが、約2年が経過した今では、「こんな利用がしたい」という学生の積極的な要望に応えることができてきています。特にサポーターが企画する“法律カフェ”や一般学生も企画に参加する“コモンズ企画”には学生ならではのアイデアが一杯です。そもそも、企画運営に携わる意欲やスキルを持つ学生がサポーターとして集っているのでしょうか。(失礼な言い方ですが、)そんな事はありません。現に、コモンズアカデミアで確認しましたが、グループワークでディスカッションを経験した学生は3割程度、自分の意見や考えを発表することを経験した学生は4割程度と多くなかったのです。社会で求められる「チームワーク力」「主体性」を獲得する機会が、これまでに十分でなかったことがうかがえました。

そんな中、サポーターが成長できたのはなぜでしょうか。まず確認すべきなのは、「主

体性」や「コミュニケーション能力」が極めて“抽象的”な能力であると言う事です。また、この抽象的な能力を伸ばす確実な方法を断定することが私にはできません。しかし、抽象的な能力だからこそ、日常生活のいろいろな場面で能力を伸ばす機会があると思います。それがコモンズサポーター(制度)と言う場面なのだと思います。例えば、コモンズセンターをより良い場所、より楽しい場所にするためにはどうしたらよいでしょうか。自分ひとりで考えるだけでなく、他の人と話をしてみることも大切だと、サポーターは実感しています。大げさな事では無く、「もっと良くしたい」という意識をもつことが成長のきっかけになっているはずです。

●教職協働によるサポート

大学において、教職協働という言葉が一般的に使われるようになってきたと感じます。構成される文字を見る限り、教員と職員が協力しあって働くことであると理解され、これは同一組織のなかで、同一理念を実現するためには、自明のことだと思います。コモンズセンターでは、教職協働で「学生自らの力で育て、創る」をサポートします。

特にコモンズサポーターの育成面において、教職協働は不可欠です。まず、コモンズサポーター制度を設置しましたが、管理面では職員の関わりが大変重要です。センター長を含め、3名の教員は専任ではありません。コモンズサポーター(学生)に接する時間は圧倒的にコモンズセンター事務室の職員が長くなります。課長以下3名の職員には、コモンズサポーター制度を運用するシステムの構築に大きく関わって頂きました。単に教員と職員とが役割分担するのではなく、お互いの能力や特質を活かしつつ、溶け合うような関係で多様な学生支援を展開するような関係でなければならぬと考えています。今後、さらにコモンズセンターの教職員スタッフがチーム力を高め、教員と職員とが目標を共有しつつ協働して学生支援にあたります。

われわれ教職員は、コモンズセンターが学生の成長する環境として教職学協働で有機的に運用できるように考えています。多少、はみ出したサポーターも居ます。そのはみ出した部分を尊重し、同時に、一番大切な価値観とかモラルとかいった部分はきちんと伝えます。我々スタッフには暗黙のルールがあります。「学生が失敗したときの事を言わない」「経験したことが無い事を知った様に言わない」などです。学生の成長環境をどのように整備したらよいのか、まだまだ共に勉強中です。

●コモンズセンターの近況

コモンズセンターがオープンして約2年が経ちました。多い日には300人を越える利

用者があります。利用形態も様々で、クラブ・サークルの発表や打合せ、資格取得の勉強会や個人での勉強、仲間と共にレポート作成、プロジェクトの議論など、実に多様です。さらに、利用マナーの良さは特筆に価します。オープン前に様々な事例を想定し、その対処を考えていましたが、杞憂に終わりました。

●おわりに

「不言実行館 ACTIVE PLAZA」は学生が自ら学び、人間力を高め、あてになる人間として成長することを期待して建設されました。人間力とは、(定義に議論の余地がありますが)自ら考え生きる力だと思います。人生は様々で、いろいろな人生があつて良いと思います。どのような人生を送るのも、学生自身の価値観の問題であり、他人がとやかく言うものではありません。しかし、最近の学生と話をする、(一部の学生ですが)人生の目標や戦略を全くと言って良いほど持っていないことに驚かされます。混乱している学生もいれば、何も考えていない学生もいます。さらに残念に思うのは、目標と戦略がミスマッチしている学生です。高い目標を掲げているのですが、戦略がそれにマッチしていなければ、結果が伴いません。情報通信技術等が急速に発達したこの時代、多くの物事が以前よりも加速しており、何度もやり直しが許されるようなのんびりとした時代ではありません。学生時代の選択ミスが致命的ですらある恐れがあります。だからこそ、コモンズセンターでの学びを通じて人間力を磨き、生き方を定めて欲しいと願っています。

中部大学 コモンズセンターHP:<http://www3.chubu.ac.jp/commons/>

龍谷大学ラーニングcommons

龍谷大学 学修支援・教育開発センター長／経営学部 教授 長谷川岳史



龍谷大学ラーニングcommons

第22回 コンソーシアム京都FDフォーラム 第9分科会
2017年3月5日

龍谷大学 長谷川岳史
(教学企画部長／学修支援・教育開発センター長／経営学部教授)



龍谷大学

創立 1639年 西本願寺内に創設された僧侶養成機関「学寮」が起源
建学の精神 「浄土真宗の精神」

教育理念・目的 建学の精神に基づき「真実を求め、真実に生き、真実を顯かす」人間を育成する

学舎 大宮（京都市下京区）・深草（京都市伏見区）・瀬田（滋賀県大津市）

規模

- 9学部（文・経済・経営・法・政策・国際・理工・社会・農）
- 1短期大学部
- 9研究科修士課程（文・経済・経営・法・政策・国際・理工・社会・実践真宗）
- 8研究科博士課程（文・経済・経営・法・政策・国際・理工・社会）
- 法科大学院

学生数 約20,000人



徽章（校章）

三宝（仏・法・僧）章と八角菊くずし紋の一部からなる





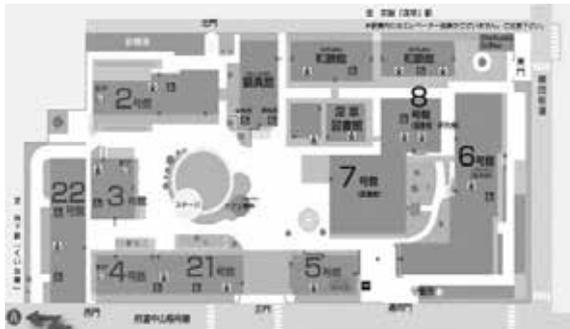
八角菊くずし紋(本願寺) 三宝章(サンチー 1世紀) 三宝章(仏足石 ガンダーラ 2世紀)



2015年度の龍谷大学

- ・私大としては35年ぶりに「農学部」新設(瀬田)
- ・国際文化学部を深草移転にともない改組し「国際学部(国際文化学科・グローバルスタディーズ学科)」開設
- ・国際センターを「グローバル教育推進センター」に発展的改組
- ・大学教育開発センター(2001年4月設立)を「学修支援・教育開発センター」に発展的改組
- ・「龍谷大学ラーニングcommons」開設
スチューデントcommons・グローバルcommons・ナレッジcommonsを深草(4月)・瀬田(9月)両学舎に開設

龍谷大学 深草学舎

龍谷大学ラーニングcommons(深草)




和顔館(わけんかん)

名 称	和顔館 (WAKENKAN)
規 模	地上5階/地下2階
構 造	鉄筋コンクリート+鉄骨造 一部鉄骨鉄筋コンクリート
総面積	5,721.66㎡ 延床面積: 27,632.37㎡

和顔愛語(わけんあいご)
やわらかな顔色とやさしいことば、やわらいだ笑顔をし、親愛の情のこもったおだやかなことばをかわすこと。なごやかな顔、愛情あることばで人に接すること。『無量寿経』上。

龍谷大学ラーニングcommons ～設置前の課題～



・学生の居場所が少ない
 ……屋根だけ、あるいは屋根無しのオープンスペースはあるが、真夏、真冬は居られない。
 ・1F部分に学生の姿が見えない…1F部分は教室かカウンターか壁。学生の普段の姿が見えない。

活気が無い閑散としたキャンパス
学生との接点は教室（授業） 事務室のカウンター越し（手続き）

・学修支援環境が脆弱…目的別支援環境はある程度充実しているが、目的のある学生しか行かない。
 ・学修環境は静かであれば…一部のスペース(ほとんどが要予約)を除いて、しゃべることは悪。

学びの矮小化：自分が登録した授業における経験＝学生の授業観・教員観
教育の矮小化：自分が担当している授業の運営＝教員の授業観・学生観

それぞれ必要で重要な環境ではある。だが、もう少し何とかならないか…
見えるようにしてみたら？ つなげてみたら？

龍谷大学ラーニングcommons ～議論の経過～



2011年 ・図書館：龍谷ラーニングcommons検討ワーキング(1月～)
 ・国際センター：キャンパスの国際化に向けた機能充実
 ・情報メディアセンターの協力は必須
 ○深草キャンパス施設検討委員会(6月) ※この時点では上記3部署のみ参加していた
 ・大学教育開発センター：指定研究PJ「学生の学修支援環境に関する研究」(4月～)
 第7回 龍谷大学FDフォーラム「学びのコミュニティをデザインする」(12月)
 基調講演：「学びの空間が大学を変える」山内祐平先生（東京大学大学院情報学環）

2012年 深草キャンパス施設検討委員会「深草キャンパス施設整備計画について」[答申](3月)
 ☆深草キャンパス新1号館(仮称)施設検討委員会
 「深草キャンパス新1号館(仮称)施設整備計画について」[答申](5月)
 ★包括的な学生支援体制検討委員会(10月)

2013年 包括的な学生支援体制検討委員会の検討事項として
 「龍谷大学ラーニングcommons(仮称)の展開方策と運営体制のあり方について」を追加(10月)

2014年 包括的な学生支援体制検討委員会の下に「瀬田キャンパスcommons検討委員会」(4月)
 「包括的な学生支援体制検討委員会における
 『学生支援に関する検討』及び『commonsの新展開に関する検討』について」[最終答申](7月)
 ©龍谷大学ラーニングcommons設置準備委員会(10月)

大学教育開発センター（現：学修支援・教育開発センター）の指定研究PJ



・2011年度「学生の学修支援環境に関する研究」
 ※龍谷大学FDフォーラム「学びのコミュニティをデザインする」

・2012年度「学びのコミュニティの形成」

・2013年度「学生の主体的な学びのコミュニティにおける学修支援機能の研究」

2013年度「報告書」のまとめ(抜粋)

いわゆるラーニングcommonsは、作る事が目的ではない。それがデザイン偏重になってしまえば、全く意味をなさない。各大学でいわゆるラーニングcommonsが次々と設置される中、他大学の事例をイメージだけでそのままコピーすることは危険である。

調査した大学に共通しているのは、本当に大事にしたいコンセプトが明確であり、それに基づき、限られた予算やスペースの中で、各大学のコンセプトに応じた設備・什器を整え、学生による「学び」の創造(創出)と共有(交流)の空間とする仕組みを、場を育てながら考えているということである。

そのためには、コンセプトに基づきながら、「～しかできない」ではなく「～もできる」可能性を秘めた場へと育てていく組点が重要である。調査した大学は、設置前と設置後で、学生の利用状況を見ながら、柔軟に運営方法を変化させている。ラーニングcommonsは育てていくものなのである。

注意したこと：陣取り合戦は不毛！ コンセプトを決めよう！



龍谷大学ラーニングcommons

学生による多様な学びの空間

スチューデントcommons
学生による「学び」の創造と交流の空間

グローバルcommons
マルチカルチャー、マルチリンガルな活気に満ちた学びの空間

ナレッジcommons
学生が主体的に「調べ、考え、書き、作る」知の空間

commonsのみを「学び」の空間と位置づけるのではなく
 commonsが拠点となって、全学のすべての空間に「学び」が拡がるのがねらい

commonsの機能 ～スチューデントcommons～



コラボレーションエリア Collaboration Area
 個人学習やグループ学習を行う空間。組み合わせが自由なユニークな机や、可動式ホワイトボードがあり、状況に応じた学修環境のアレンジができる。
 【予約不要】【飲食可※臭いの強い食べ物や汁気の多い食べ物を除く】

クリエイティブエリア Creative Area
 メディア機器(ノートPC、タブレット等)の貸出・技術サポートやライティング支援等を受けることができる。
 【予約不要】【飲食可※臭いの強い食べ物や汁気の多い食べ物を除く】

アクティビティホール Activities Hall
 各種アクティビティ会場として、多様な用途に対応できる場。ワークショップや成果発表等のイベント会場として使用できる。
 【要予約】【飲食可※臭いの強い食べ物や汁気の多い食べ物を除く】

その他:
 メディアスタジオ、プリントスポット、ギャラリーは【飲食不可】



commonsの機能 ～グローバルcommons～



グローバルラウンジ Global Lounge
 留学生や学生が気軽に集い、学生が自主的に国際交流を推進することができる。
 【予約不要】【飲食可※臭いの強い食べ物や汁気の多い食べ物を除く】

ランゲージスタディエリア Language Study Area
 個人のレベル・ニーズに応じた様々な語学学習が可能。各種語学試験対策等を集中して学習することができる。
 【要予約】【飲食不可】

グループスタディールーム Group Study Room
 各種資格試験のスピーキング対策や異文化理解等の様々なグループ学習をすることができる。
 【要予約】【飲食不可】

スピーキングブース Speaking Booth
 スピーキング能力を磨くためのスペース。スピーキングのトレーニングが気軽にできる。
 【要予約】【飲食不可】

マルチリンガルスタジオ Multilingual Studio
 ネイティブスピーカー等と英語・その他の言語の実践練習を行い、積極的に外国語を活用し、語学力を高めることができる。
 【要予約】【飲食可※一部のイベント・行事を除く】

コモンズの機能 ～ナレッジコモンズ～



ナレッジスクエア Knowledge Square

ナレッジコモンズの中心となるオープンスペース。可動式の机などを使って空間をデザインしつつ、自由に学べる。サービスカウンターでは、学術情報の利用・検索方法も含めたコモンズ利用者の学修支援を行っている。

【予約不要】【フタ付き容器に入った飲み物のみ可(食事は不可)】

グループワークルーム Group Work Room

予約制で利用できるグループワークルームは、深草ナレッジコモンズには、計7室、瀬田ナレッジコモンズには、計6室あり、壁面ホワイトボードも完備。複数人での発表やプレゼンの準備、グループ学習等に最適。

【要予約】【フタ付き容器に入った飲み物のみ可(食事は不可)】

AV&PCコーナー Audio Visual and Personal Computer Corner

深草ナレッジコモンズ内に設置されているPC(検索端末を除く)は、視聴覚資料を利用したり学術情報を検索したりするだけでなく、文書や発表資料などの作成もできる。

瀬田ナレッジコモンズでは、DVDの視聴は、従来の新館1階の視聴覚コーナーで、また学術情報を検索したり文書作成などは新館1階のインターネット端末コーナーや瀬田学生センター(情報メディアセンター)で借用したノートPCをナレッジスクエアで利用することができる。

【予約不要】【飲食不可】

龍谷大学ラーニングコモンズの運営体制①



基本方針

龍谷大学ラーニングコモンズは、各コモンズがそれぞれ教学主体とかわかり、機能別コモンズの個別の運営を基本としながらも、3つの機能別コモンズの相互連携を図り、効果的な運営を行うこととする。
なお、龍谷大学ラーニングコモンズは、学生の多様な主体的学びを支援する場であることを踏まえ、利用者である学生の意見を聞き運営することを原則とする。

・機能別コモンズの運営体制(審議機関)

機能別コモンズの運営に関する審議・決定を行う。

1) スチューデントコモンズ(深草)、(瀬田)

運営主体: 学修支援・教育開発センター会議 事務所管: 教学企画部

※当分の間、スチューデントコモンズ(瀬田)の事務は、情報メディアセンター事務部に委託する。また、会議の審議事項に応じて、情報メディアセンター事務部の協力を得ることとする。

2) グローバルコモンズ(深草)、(瀬田)

運営主体: グローバルコモンズ運営委員会 事務所管: グローバル教育推進センター事務部

3) ナレッジコモンズ(深草)、(瀬田)

運営主体: 図書委員会 事務所管: 図書館事務部

龍谷大学ラーニングコモンズの運営体制②



・学舎コモンズの運営体制(事務連絡機関)

学舎コモンズにおける機能別コモンズ間の連絡・調整を行う。

1) 深草コモンズ

運営主体: 深草コモンズ事務連絡会 事務所管: 教学企画部

2) 瀬田コモンズ

運営主体: 瀬田コモンズ事務連絡会 事務所管: 瀬田教育学部

・ラーニングコモンズ全体の運営体制(協議機関)

龍谷大学ラーニングコモンズの運営について協議する。

運営主体: 龍谷大学ラーニングコモンズ運営協議会

構成員: 学修支援・教育開発センター長【議長】、瀬田学部長、グローバル教育推進センター長、図書館長、情報メディアセンター長、教学企画部事務部長、瀬田教育学部事務部長、グローバル教育推進センター事務部長、図書館事務部長、情報メディアセンター事務部長
※協議会は必要に応じて、関係者から意見を聴くこととする。

事務所管: 教学企画部

協議が現場から離れないように、審議機関＜事務連絡機関＜協議機関を配置。

龍谷大学ラーニングコモンズの運営体制③



学生の協力

①各コモンズ共通の専門スタッフ(コモンズチューター)

各コモンズ共通の専門スタッフとして、ライティング支援や語学学習支援を行うコモンズチューターを置く。コモンズチューターについては、2015年度龍谷GP事業「龍谷大学ラーニングコモンズ(深草コモンズ)におけるコモンズサポーター育成トレーニングシステムの構築※」に基づいて、2015年4月から深草コモンズに配置。

※学修支援・教育開発センター、グローバル教育推進センター、図書館の協同申請中。

※龍谷GP申請段階では「コモンズサポーター」としていたが、後に「コモンズチューター」に名称変更。

※コモンズチューターは学内公募。面接の後、研修を受けた大学院生15名(2016年度)。時給1500円。

②学生ボランティアスタッフ(コモンズサポーター)

コモンズの運営に係る学生参画の第1ステップとして、各コモンズの所管部署が日常業務等を通じ協力関係にある既存学生組織(※)を核とした連携を図る。まずは、ここを核としてコモンズ機能の改善・充実を目的とした定例ミーティング等を開催することで、学生の意見をコモンズの運営に取り入れていく。

※ スチューデントコモンズ … 10学部合同学生会(学生FDサロン等)

※ 全学協議会にて大学執行部へ正課の改善を提案する学友会組織

グローバルコモンズ … SABS等(留学相談等)

※ 留学経験者の有志による学生組織。サークルではない。

ナレッジコモンズ … ライブラリーサポーター(ビブリオパル等)※図書館が募集している学生

学修支援例～コモンズチューターによるライティング支援～



【支援時間】

通常授業期間中の平日(月～金)の11:30～16:30

※1セッション:30分(目安)

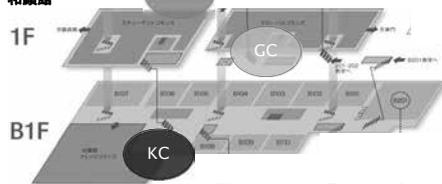
【利用者数】

2015年度 計374人(内訳:前期192人、後期182人) ※延べ数

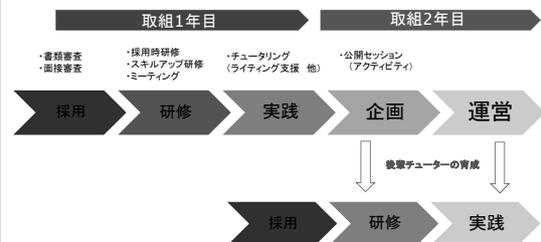
2016年度 計936人(内訳:前期638人、後期298人) ※延べ数

【場所】

和顔館



コモンズチューター育成システムのイメージ



「振り返り」「成果・課題の共有」「フィードバック」等を行うことで、質の高い人材(コモンズチューター)を育成する

© RYU KYU DAIGAKU 2016. All Rights Reserved.